

[研究ノート]

## 知的障害のある成人の生涯学習活動におけるボランティアの学び - 「オープンカレッジ in あおもり」における実践から -

廣森直子<sup>1)</sup> 山内修<sup>1)</sup>

### The Learning of Volunteer in Life-long Learning Activities of People with Intellectual Disabilities

Naoko Hiromori<sup>1)</sup> Osamu Yamauchi<sup>1)</sup>

#### Abstract

Life-long learning activities of people with intellectual disabilities have been supported by various volunteers because there are not sufficient programs in the social system. In Aomori prefecture these activities are supported by a limited number of people who are related to people with intellectual disabilities. In this paper we review the "Open College in Aomori" program which is held at Aomori University of Health and Welfare as a case study. We examine what the volunteer participants in this activity learned during this experience through the analysis of a volunteer questionnaire. Analysis results indicate that volunteers learned how to communicate with persons with intellectual disabilities. They also increased their understanding of people with intellectual disabilities and the philosophy of the "Open College in Aomori" program. The volunteer activity provided participants with a meaningful, real life learning opportunity. It is necessary to encourage more people to take part in the life-long learning activities of people with intellectual disabilities and to expand their volunteer opportunities.

(J.Aomori Univ. Health Welf. 10 (1) : 17 - 26, 2009)

キーワード：ボランティアの学び、知的障害のある成人、生涯学習

Key Words : Learning of volunteer, people with intellectual disabilities, life-long learning

#### 要旨

知的障害のある成人の生涯学習活動は、行政による制度的な保障が十分ではなく、さまざまな立場の人のボランティアにより支えられてきた。青森県における現状は、限定された団体や関係者による参加や支援にとどまっている状況にある。本稿では、事例として青森県立保健大学で開催している「オープンカレッジ in あおもり」の活動に参加する学生ボランティアをとりあげ、活動への参加をとおして何を学んでいるか、どのような意識変容を経験したかについて、ボランティアを対象に行ったアンケートの記述回答から分析した。その結果、活動への参加経験によって、知的障害のある人へのコミュニケーションのとり方を身につけるだけでなく、知的障害のあ

る人についての理解、オープンカレッジの理念についての理解などの点で、参加経験が「学び」につながっていることが明らかになった。ボランティアがこのような活動に参加することの意義を「学び」という側面から意味づけていくことは、今後、知的障害のある成人の生涯学習活動に多様な市民の参加を図り、活動を広げていく上で重要なことである。

#### 1. はじめに

生涯学習政策は、広く一般的により多くの人が生涯学習の権利を保障されるようにとの前提として組み立てられている。それゆえに、その対象となる「学習者」は、広く一般の人が想定され、本稿でとりあげようとしてい

1) 青森県立保健大学健康科学部

Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

る知的障害のある成人のような、ある特定のニーズを持った学習者の存在は、周辺的に位置づけられがちである。そのような現状において、知的障害のある人の生涯学習は、行政による制度的保障が十分ではなく、さまざまな立場の人のボランティアによって支えられていることが多い。

青森県では、社会教育行政において「障害者青年学級」を開設している<sup>1)</sup>。現在の実態としては、特別支援学校（旧養護学校）において教職員が主体となって、その卒業生を対象として行っている青年学級の企画に対して県が予算を手当てして開催されており、県は各校での実績報告を取りまとめているという状況である。このほか、青森県内では、青森市・弘前市・八戸市など各地で、社会教育施設や社会福祉施設などを会場として、さまざまな立場の人によるボランティアに支えられている活動がある（2005年調査当時<sup>2)</sup>。そのような活動に参加する知的障害のある成人の「学び」について、受講生を対象とした調査を行い、その現状と課題について考察してきた<sup>3)</sup>。このような活動の課題の一つとして、支援や参加が限定された団体や関係者ととどまっていることがある。そこで本稿では、青森県立保健大学を会場として開催している「オープンカレッジ in あおもり」の取り組みを取り上げ、活動を支えるボランティアに注目したい。この取り組みの特徴は、ボランティアのスタッフ・サポーターとして、学生が多く参加し、参加を通して学生ボランティア自身もまた「学び」を得ていることであり、本稿ではその「学び」の内容が具体的にどのようなものであるのかを明らかにしたい。このような「学び」の内容を明らかにし、このような活動に参加することの意義を意味づけていくことは、多様な市民の参加を図る上でも重要なことであるといえよう。

## 2. 知的障害のある人を対象としたオープンカレッジ

### 2-1. 概要

知的障害のある人を対象としたオープンカレッジは、1998年に大阪府立大学ではじめて開講された取り組みであるが、その後、同様の手法で全国的に展開されるようになってきている<sup>4)</sup>。運営方法などは各地で異なっているが、明確に次の3つの理念を掲げた活動である。第一に「知的障害がある人の人権（教育）の保障」、第二に「知的障害がある人の発達（変化）の保障」、第三に「地域社会に対する大学の役割の変革・創造（のちに「大学の貢献」と変更）」である<sup>5)</sup>。

青森県においては2000年から五所川原市、2002年から青森市において「飛び出せ！オープンカレッジ in あおもり」として開催されるようになった<sup>6)</sup>。青森市では、運営委員会方式による運営を行っており、当初から

2006年3月ごろまで知的障害のある人の保護者組織である「ドアドアらうんど青森」が運営の中心となっていた。2003年以降、青森県立保健大学を会場として開催されるようになり、現在では、運営主体も青森県立保健大学の学生サークルである「発達保障研究会」に移行し、学生ボランティアが中心になって企画運営を担うようになってきている。

### 2-2. 「飛び出せ！オープンカレッジ in あおもり」の運営実態

青森県立保健大学におけるオープンカレッジの開催日の実際の運営は表1のようなスケジュールによっている<sup>7)</sup>。ボランティアにはスタッフとサポーターがいる。スタッフは「発達保障研究会」のメンバーであり、企画段階から講座内容の企画やそれに沿った講師への交渉・調整、サポーターの募集、受講生への案内の送付、シラバスなどの配布資料や名札の作成などさまざまな事前準備、および事後の反省会や報告書作成を行っている。サポーターは、「発達保障研究会」の募集に応じて参加し、事前のサポーターオリエンテーション、当日の運営、反省会に参加する。当日には、スタッフが企画運営、サポーターが受講生の学習サポートの役割につくことが多いが、受講生のマンツーマンサポートにつくものもある。

表1 第22回「飛び出せ！オープンカレッジ in あおもり」プログラム（2008.5.25（日）開催）

時間	内容	スタッフ・サポーターの動き
8:30	スタッフ集合	打合せ
9:00	スタッフ・サポーター集合	全体打合せ、教室設営
10:00	受付開始	出欠確認、シラバス配布、名札配布、会計、講師打合せ、写真撮影開始
10:30	開講式	司会
10:40	各教室案内・トイレ誘導	
10:50	1講座目・グループワーク（通年講座：異文化コミュニケーション、芸術Ⅰ、音楽、礼儀作法、健康科学の5講座開講）	～12:00まで。受講生のサポート、グループワークの進行サポート
12:00	記念撮影	
12:20	昼食	お弁当の配布、食堂への誘導
12:50	各教室案内・トイレ誘導	
13:00	2講座目・グループワーク（選択講座：芸術Ⅱ、ウォーキング、身を守ろう、ボールゲームの4講座開講）	～14:00まで。受講生のサポート、グループワークの進行サポート
14:20	会場案内・トイレ誘導	
14:30	閉講式	司会、受講生アンケートの記入サポート、各講座の発表サポート
15:30	片付け、反省会	サポーターアンケートの記入

オープンカレッジは、前述の理念でも謳われているように、知的障害のある成人の生涯学習の場の保障ということがもっとも重要な目的であるが、「仲間づくり」の場としての機能も重要である。多くの知的障害のある成人は、社会から孤立しがちな存在であるといわれる。国の障害者福祉政策は「脱施設化」の方向へと舵がきられたようであるが、知的障害のある成人が地域で暮らしていくための社会的資源は整っているといえる状況ではない。オープンカレッジでは、「学ぶ」ことの保障だけでなく、「共に学ぶ」ことを通して、知的障害のある成人どうし、あるいは知的障害のある成人と支援者とのつながりが生まれている。現時点で、青森で行っているオープンカレッジは、本人活動のような本人のエンパワーメントを支える活動まで発展しているとはいいがたいが、そのきっかけとなりうる人と人とのつながりをつくる場となる可能性を持っている。以下では、ボランティアの「学び」だけでなく、そのような側面についても具体的に明らかにしていきたい。

### 3. 研究方法

ボランティアに参加することによる「学び」の内容について具体的に明らかにするために、オープンカレッジに参加するボランティアを対象とした質問紙調査を実施した。

#### 3-1. フィールドの概要

オープンカレッジに参加する受講生は、毎回30～50名程度であり、ほぼ同数程度のボランティアが参加してきた。受講生の年齢層は18～50歳代まで幅広く、「軽度」の人が多く、「中度」「重度」の人の参加もある。ボランティアのほとんどが青森県立保健大学の学生である。

#### 3-2. 調査票の設計

質問項目には、個人属性のほか、ボランティアの「学び」として想定され、記述による回答がしやすい項目（良かったこと・うれしかったこと、受講生の変化や成長を感じたこと、継続参加の理由、困ったこと・難しいと感じたこと、知的障害のある人に対する参加前のイメージ、活動を通じてのイメージの変化、活動理念の理解、経験を他の活動に生かすこと、自分自身の成長など）を設定し、4件法による回答および具体的な内容を明らかにするための記述による回答を求める形で設計した。

#### 3-3. 調査の実施状況

調査は、2回にわたって同じ調査票で実施した。実施時期は、1回目は2006年2月（65部配布、43部回収、有効回答率66.2%）、2回目は2008年2月（29部配布、11部回収、有効回答率37.9%）である。

調査票の配布は、年度の最後のオープンカレッジの開催日<sup>8)</sup>に参加したボランティアに配布し、郵送により

回収した。2回にわたってアンケートを実施したのは、この間に、企画運営の主体が、保護者組織から学生サークルへと移行した経緯があり、そのことがどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを意図していた。1回目の調査結果については、すでに報告書にまとめている<sup>9)</sup>。しかし、2回目の調査は、配布対象者数および回収数が少なかったため、当初予定していた定量的な比較は困難と判断し、本稿では記述回答を中心に分析を進めたい。以下で述べている数値は、特別に記述がない限り、1回目と2回目の調査で得られた全データによる単純集計の結果である。

### 3-4. 倫理的配慮

調査票は無記名によるものとし、回答は自由意志によるものであること、個人情報保護の配慮について調査票に記載し、調査票が回収（郵送による）されたことをもって同意したものとみなした。

## 4. 結果と考察

### 4-1. ボランティアの属性

学年は1年生が46.3%（25名）を占めており、参加回数は1～3回が37.0%（20名）である。1年生が多くを占めているのは、ボランティアへの新規参入がうまくいっている結果であるとも考えられるが、その後の継続参加にどうつなげていくかという課題があるともとれる。女性が85.2%（46名）をしめており、男性の参加が少ない。受講生は男性が多いため、同性介助が難しいという現状がある。本学は現在4学科体制であるが<sup>10)</sup>、96.3%（52名）が社会福祉学科の学生であった。ボランティアのうち70.4%（38名）がサポーターであり、サポーターの存在は活動には不可欠である。社会福祉学科の学生が中心になって運営しているが、他学科の学生への参加の呼びかけや活動そのもののPRなど、活動を広げていくための課題がある。

### 4-2. 良かったこと、うれしかったこと

参加して良かったこと、うれしかったことは、98.0%（51名）が「あった」「少しあった」と回答している。その内容として、まず多かったのは、知的障害のある人との接し方、コミュニケーションについて学ぶことができたということである。（以下、「」内の斜体は調査票の記述回答からの引用。（）内は、学年、性別、スタ（スタッフ）・サポ（サポーター）を示す。下線は筆者による。）

「障がい者との接し方などがわからなかったので、オープンカレッジを通して学ぶことができた。」（1年生、女性、サポ）

「知的障がい者との関わり方を学んだ。話しかけてくれ

たり、冗談を言いあう等、交友関係をもてた。」(2年生、女性、サポ)

「受講生の方々や他のサポーターとの出会いがあった。障害者の方々とのコミュニケーションの取り方がわかった。少しだけ人見知りがなおった。」(2年生、女性、スタ)

さらに、受講生とのコミュニケーションやかかわりを通じて「顔と名前」を覚えてもらい、受講生から個人として認識してもらえたことがある。

「名前や顔を覚えてくれる受講生が増えたこと。」(1年生、女性、スタ)

「学内はもとより、受講生さんとのつながりができた。町で声をかけられるとうれしい。」(1年生、女性、スタ)  
「個人的に励ましの手紙をいただいたこと。「会えてよかった」いわれたこと。様々な年代の人、価値観の人と触れ合えるので、知的障がい者に学びの場を提供できること自体にやりがいを感じている。」(3年生、女性、スタ)

また、自分自身が支援者としての「役割」を果たすことで、受講生の変化を感じとることができ、そのことが自信につながっていることをあげるものもある。

「自分がサポートをすることで、受講生さんが、少しずつ発言できたり、わからなかったことを理解できるようになったりしたこと。また、受講生さんたちに「次のオープンカレッジにも来てね」と言われるようになり、うれしく感じた。」(1年生、女性、サポ)

「受講生に「また来るからね」と言われたこと。講師やサポーターなどオープンカレッジに興味をもってくれる人がいたり増えたりしたこと。自分にできること(交渉 e t c.) がふえて自信がついた。人とのつながりができたこと。」(3年生、女性、スタ)

さらに、知的障害のある人だけでなくいろいろな人に接することや、そのことによる価値観の変化や、受講生の学ぶ姿勢から「学ぶ」という行為そのものへの見直しもある。

「活動を通じてたくさんの人と接することができたこと。」(1年生、女性、サポ)

「価値観がかわった。人の内面の良さに注目できるように(少しだが)なったと思う。」(1年生、女性、サポ)

「学ぶ大切さを気づかせてもらった。初心に戻れる。」(3年生、男性、スタ)

#### 4-3. 受講生の変化や成長を感じたこと

ボランティアとして受講生と間近に接することで、さまざまな場面で受講生の成長や変化に気づいている。たとえば、表情や態度の違い、前回と比べてできるようになったこと、より積極的な学習態度、接してくる姿勢など、その内容は多様である。

「笑顔が多くなり、発言が増えたように感じています。」(1年生、女性、サポ)

「開こう式と閉こう式での表情がちがうこと。」(3年生、男性、スタ)

「表情がいきいきしていると感じられたから。人によっては、OCに参加していくうちに落ちつきがみられるようになったと感じたから。「また来る」というなど、常に目標をもって挑戦する姿勢をみなさん持っているの。」(3年生、女性、スタ)

「協調性や、自己主張ができるようになってきていると感じています。」(4年生、女性、スタ)

「人の話をきけるようになった人がいた。受講を重ねることで技術等がレベルアップした。」(4年生、女性、サポ)  
「前回のことをちゃんと覚えていたり、新しく講座に参加した人に対し、先輩の様な感じでふるまっていたとき。」(2年生、女性、サポ)

「一方的に自分の話をしていた人が、相手の都合を考慮されるようになったこと。物静かな方が、自分の思っていることを伝えられていたこと。オープンカレッジをやめるという選択肢をもつ人もいたこと。運営についての意見を言ってくれるようになったこと。」(3年生、女性、スタ)

「開講式の発表のときに、感想を述べる人を決めるときに、立候補する人が回を追うごとに増えている気がする。」(1年生、女性、サポ)

「1対1で作品づくりをした受講生が時間が経つにつれて自分から話をするようになった。」(2年、女性、サポ)

「自分で作品等を作成することによってその難しさや楽しさを知り、その次のオープンカレッジの講座では違った作品を作成していたこと。」(1年生、女性、サポ)

「前の回の講義内容を生かしながら、その回の講義をうけていたこと。」(1年生、女性、サポ)

「2回目か3回目の受講になると授業の流れをつかんでいてとても楽しそうだった。」(2年生、女性、サポ)

「積極的になった。事前学習をしに来る人もいた。」(3年生、女性、スタ)

受講生が前回に比べて変化しているかどうかは、注意して接していなければ、また、回を重ねて接していなければ気づかないことも多い。受講生の成長や変化に気づくことは、後述するように、活動に継続して参加する動

機とも関連していると考えられる。

#### 4-4. 継続参加の理由

ボランティアの91.7% (49名)は、これからもオープンカレッジへの参加を「続けたい」「できれば続けたい」と回答している。その理由は、前述の「よかったこと」とも重なってくる内容が多いが、受講生と結んだ個人的な信頼関係を継続したい、という回答が多かった。

「参加することで障がいを持つ人と交流を深めることができ、そのような人に対する見方も変わり、また充実した時間を過ごすことができるから。また、仲良くなった受講生と1回限りの関係で終わらせたくないから。」(1年生、女性、サポ)

「受講生さんとまた会いたいから。久しぶりに会う友人と遊びに行くような感覚で、「やるなら参加する」というような感じで、もうあたり前のように感じています。」(3年生、女性、サポ)

「卒業してしまうが、せっかく築いた人間関係、信頼関係を継続したい。」(4年、女性、サポ)

「継続することがお互いをよく知ることだから。」(3年生、男性、サポ)

前述したような受講生の成長や変化を見逃したくないという思いもあるようである。オープンカレッジは、年4回という一定期間をおいての開催形態であるため、一度参加できなければかなり長期にわたって受講生と接する機会がなくなってしまう。受講生が参加を重ねるなかで変化していくということに気づくことが、継続参加を促しているともいえよう。

「継続して参加すれば、受講生の方々の変化を見つけられ、また自分もなにか得るものがあるかもしれないから。」(1年生、女性、サポ)

また、自分自身が得るもの(知識や技術、人とのかかわりなど)があるという期待も動機となっている。このような期待に応える経験が参加を通して得られたかどうか継続参加につながるかどうかに影響を及ぼしていると思われる。

「いろいろな障がいについて詳しく知っていききたい。また、障がい者の方ともっと上手に付き合い、話せるようになりたいと思うから。」(1年生、女性、サポ)

「いろんな人と関わってみたいと思っているから。」(3年生、女性、サポ)

「将来に役立てたいから。」(1年生、女性、サポ)

#### 4-5. 困ったこと、難しいと感じたこと

参加して困ったことや難しいと感じたことが「あった」「少しあった」のは90.8% (49名)であった。その内容で最も多かったのは、受講生とどのようにかかわればよいのかということである。具体的には、コミュニケーションのとり方、パニックを起こしたときや自傷行為への対応の仕方、どこまでサポートすべきかといったことである。

「言葉の聞き取りなどのコミュニケーションや突然の自傷行為など。」(3年生、女性、サポ)

「シャイな受講生とどのように接していくか。サポーターやスタッフに触ってくる受講生に対する対処法。サポーターをどのように支援したら、受講生と積極的に接してくれるか。」(1年、女性、スタ)

「初めは受講生とコミュニケーションを取るのが難しかった。また、パニックを起こしたとき、講座に参加する気をなくしたとき、どのように対応したらよいか分からなくなり、困った。」(1年生、女性、サポ)

「自閉症で私より年上の人に対し、つい子供に対するような言葉遣いになってしまったとき、難しいと感じた。」(4年生、女性、サポ)

「言語でコミュニケーションができない方とどう接すればよいのか困った。パニックを起こしたとき、どう対処すればよいか迷う。受講生と仲良くなったため、卒業・就職で会えなくなると思うと今から辛くて困っている。(中略)自分の伝えたいことが伝わらないときがあること。」(3年生、女性、スタ)

参加前から知的障害のある人と接した経験があったものは少なく(後述)、困ったことや難しいと感じることがあるのは、一種の通過儀礼的なものであるともいえよう。困った、難しいと感じたことに対して自分自身で何らかの対応を模索することが「学び」となるとも考えられる。

#### 4-6. 参加前の知的障害のある人に対するイメージ

オープンカレッジに参加する前から知的障害のある人とのかかわりがあったのは14.8% (8名)であり、大多数はほとんどかかわりをもっていないか、少ししかなかったという状況である。家族など身近な存在として知的障害のある人と接してきた経験のある人は、知的障害のある人に対して特定のイメージを抱いているということとはなかったが、かかわりをほとんど持っていなかった人は、オープンカレッジに参加する前に抱いていた印象は、かなり強いマイナスイメージが多かった。

「こわい、意味不明な行動、言動（奇声、ひとりごと）、かかわらない方がいい。」（1年生、男性、スタ）

「特異な人。自分とはまったく違う存在で避けようとしていた。」（2年生、男性、サポ）

「バス等で見かけると、うわごとを言っていることが多く、何を考えているのか分からず、怖いというイメージを持っていた。」（1年生、女性、サポ）

このような記述は、知的障害のある人とかかわる経験の少なさや知識のなさによるものであろう。オープンカレッジ参加前の知的障害のある人とかかわりがあると回答したものの内容は、家族など身近な存在と接していた場合をのぞくと、ほとんどが小中学校での特殊学級でのかかわりであった。日常的にどの程度のかかわりであったのかは不明であるが、豊かな人間関係が築けるようなコミュニケーションをとれるかかわりではなかったと考えられる。このように多くの人は、知的障害のある人に接する機会が少ないまま人生を過ごしている。未知なものに対して「怖い」という感情を抱くのは、人間の本能ともいえるのかもしれない。しかし、そのような社会的状況こそが、人々が漠然と抱く拒否的な感情につながり、ひいては、知的障害のある人が、さまざまな状況で社会的に排除され、孤立してしまうしくみをつくりだしているのではないかと考えられる。

#### 4-7. 活動を通じてのイメージの変化

前述のような知的障害のある人のイメージは、オープンカレッジに参加することで79.6%（43名）が「変化した」「少し変化した」と回答している。まずは、知的障害のある人は「怖い」存在ではない普通の人であり、障害がある人にもさまざまな人がいて、それぞれ個人としての特徴があるということ、知的障害のある人もまた自分の意思を持っているということに対する「気づき」、彼らの行為の意味に「気づく」ことである。

「怖くない。その人の特性によって違う。」（4年生、女性、サポ）

「障がいにもいろいろあり、軽い人では私たちとあまり変わらないんだなあと思った。明るくて元気な人が多いという印象を受けた。また、自分の考えや意見をしっかり持っているという印象も受けた。」（1年生、女性、スタ）

「当初、自分の持っていた印象は、あくまで一部にすぎず、性格は人それぞれなのだと感じ、ひとくくりにはいけないと思うようになった。」（3年生、女性、サポ）

「軽度の人とは健常者とほとんど変わらずコミュニケーションがとれるし、重度の人とも接することで何らかの意思表示をしていることに気づき、接しにくいと感じるこ

とがなくなった。」（1年生、女性、スタ）

「「一つのことにとただこだわっている」のではなく、一つのこと集中し、最後までやろうとしていることに気づいた。」（1年生、女性、サポ）

オープンカレッジに参加する前に抱いていたマイナスのイメージは、「共に学ぶ」という行為のなかで変化し、多くの「気づき」をもたらしている。このような「気づき」は、個人としての知的障害のある人とかかわりのなかで生まれてきたものである。大げさな言い方ではあるが、かかわりを通して、一人の人間としての存在の捉えなおしがあったといえるのではないだろうか。

「障がいを持っていても、普通に接することができ、何より、ひとりの人間であるというふうに見ることができるようになった。」（1年生、女性、サポ）

「障がいをもっているでもそれで見方を変えたり、表面的な部分で人と接さなくなった。その人のなかみまで、見えるようになった。」

知的障害のある人の学習意欲に気づく、ということも大きな発見であろう。このことは、後述するように、オープンカレッジの理念である「知的障害のある人の人権（教育）の保障」についての理解につながっていく。

「自己主張のしっかりしていることにおどろいた。学びたいという意識が強いことが分かった。」（4年生、女性、スタ）

「学ぶ意欲、向上心がある。人とかかわることがスキな人が多いなあ。」（3年生、女性、スタ）

「知的障害のあるなしに関わらず、受講生と同じように講座に参加することで、同じ人間の1人として知的障害者が学ぶことについての可能性を身近に感じられるようになった。」（1年生、女性、サポ）

#### 4-8. オープンカレッジの理念についての理解

オープンカレッジに参加する以前は、85.2%（46名）はオープンカレッジの理念である「知的障害者の人権（教育）の保障」について、「理解していなかった」「あまり理解していなかった」と回答している。知的障害のある人にも学習機会を保障することが必要であるというニーズは、社会一般から見ると「隠れて」いるので、知的障害のある人とかかわりをもたない人々には、そのニーズの存在が知られる機会は少ないだろう。オープンカレッジへの参加を通じて、70.3%（38名）がその理解度は「変化した」「少し変化した」と回答している。記述を見る限り、理解度のレベルはさまざまである。

「言葉を知った。また、受講生の学びたいという意欲から、教育の保障が必要だと感じた。理解したかといわれるとそうでもないのかも・・・。」(3年生、女性、スタ)  
「特に教育の保障という考えは、まったく持っていなかったが、参加してみて、障害者の教育を受ける場の少なさを実感した。」(2年生、男性、サポ)

オープンカレッジの理念にあるような「知的障害者の人権(教育)の保障」といったことをほとんど知らなかった多くの学生が、実践に参加して受講生と触れ合うことを通して、その必要性に確信を抱くようになっていく。 「隠れて」いたニーズに気づくという点でも、活動参加への意味はあったといえよう。

「オープンカレッジのような、学校を卒業してからの学習の場がどれだけ少ないか、どれだけ楽しいものなのかを学んだ。」(3年生、女性、サポ)

「学ぶ意欲がある受講生が数多くいるし、それにこたえることはあたり前だと思う。」(1年生、女性、スタ)

「学びたいという意欲を持っている障がい者はたくさんいるのに、高校を卒業すると学びの場はなくなってしまい、知的障がい者の人権の保障がないように思った。」(1年生、女性、スタ)

「持っている力はたくさんあるようなのでその力を生かせる場がもっとあればよいと感じた。」(2年生、女性、サポ)

「オープンカレッジに参加して、受講生が同じ講座を受けているのを見ると、学びたい意欲は人一倍あるように感じた。そのことを考えると、知的障害者の教育を保障することは大切だと考えるようになった。」(1年生、女性、スタ)

「学校を卒業すると、学んだり、いろいろな人と関わりながら楽しんだりする機会が減ってしまうことがわかった。学校や施設、職場以外の生涯教育の場があることは大切だと思った。」(3年生、女性、サポ)

また、このような場の保障だけではなく、人とのかわりやつながりを保障していくことへの「気づき」もある。

「障害者の生涯学習ということについて考えたことはなかったが、オープンカレッジのような場があると、学ぶということだけでなく、人との関わりやつながりを感じられる場になるので、このような場を保障することは大切だと思った。」(3年生、女性、サポ)

また、自分自身の問題意識の高まりという側面もある。オープンカレッジのような活動を継続していくため

には、実質的に支援する人材の確保だけでなく、長い目で見て社会一般に理解者を増やしていくということも必要であり、問題意識を高めるような「気づき」が得られるかは重要なことである。

「法律を少し学んだというより、そのような報道等に自然と関心を抱くようになった。」(1年生、男性、スタ)  
「自分の考えの中に特別ななかったが、意識するようになった。」(1年生、女性、スタ)

#### 4-9. 経験を他の活動に生かす

オープンカレッジへの参加する以前のボランティア活動への参加は、「積極的に参加していた」のはわずか5.6%(3名)であった。オープンカレッジへの参加を通してできるようになったこと・身についたことでは(複数回答)、「知的障害者とのコミュニケーションのとり方」が86.5%(45名)で最も多かった。ほかで割合の多かった項目は、「知的障害者との意思疎通」55.8%(29名)、「知的障害者への学習支援」25.0%(13名)、「学生どうしでの活動の運営」25.0%(13名)であった。「学生どうしでの活動の運営」や「学内外との交渉」、「活動の企画立案」などの項目は、全体としての割合は低かったが、学生主体の運営となった2回目の調査では割合は高くなっていった。

このようなオープンカレッジでの経験について、87.0%(47名)が他のボランティア活動や実習など、ほかの場面でも活かせると回答している。記述回答でその内容をみると、自分自身の人との接し方が変わったなど、活動参加を通しての経験が行動変容にもつながっている。

「知的障害者の方はもちろん、ほかの人ともコミュニケーションを上手にとれるようになったと思うので、他のボランティア活動や日常生活でも、この経験は生かせると思います。」(2年生、女性、スタ)

「積極的にコミュニケーションをとろうとする態度」(1年生、女性、サポ)

「活動というよりも人に対して、できるところをみつけるようにし、そこをほめることは関わりをもつうえで生かせると思います。」(3年生、女性、サポ)

知的障害のある成人とのコミュニケーションだけでなく、ほかの多くの人とのコミュニケーションがうまくなったということは注目しておくべきかもしれない。昨今の学生は受身的であるという言説に接することがあるが、コミュニケーションの場面での経験によってついた態度や自信は、ほかの日常的な場面においても、その「成

果」を活かせる機会が多いだろう。人としてのコミュニケーションの基本を学んでいるともいえる。

また、スタッフからは、他の活動に活かせることとして、企画運営に関する経験があがっている。以下は、いずれも運営主体が学生サークルに移行した2回目の調査時の記述回答であり、運営主体の移行による影響であるとも推察できる。

「社会人になってからの営業、企画、事務、運営、コミュニケーションなど。絶対にいかせると思う。」(3年生、女性、スタ)

「何かの交渉、写真などの記録のとり方、活動の説明、プレゼンテーション、活動の魅力をはかの人に伝える、企画・立案、レインボー<sup>11)</sup>など他のボランティアでの参加者とのコミュニケーション、受付、金銭管理。」(3年生、女性、スタ)

スタッフとしてさまざまな役割を担い、運営を成功裡に導くことができれば、それは自信につながるだろう。スタッフまたはサポーターとして参加したボランティアの84.3% (45名)は、自分自身が成長したと感じており、これまで述べてきたようなオープンカレッジに参加する経験を通じた多様な「学び」が彼女・彼らを成長させたといえよう。

## 5. まとめにかえて

ボランティアの「学び」が具体的にどのようなものであったかについて述べてきた。オープンカレッジは、「主役は知的障害のある成人(受講生)」という立場にたって運営されている。支援するボランティアはその「主役」を支える存在であり、そこに生じるボランティアの「学び」はいわば副次的な産物に過ぎないともいえる。しかし、このような立場の異なる者が「共に学ぶ」という行為そのもののなかに、すでに「学び」の契機は内在しているともいえる。実際に知的障害のある人に接することで、それまで抱いていたイメージを大きく変化させ「ひとりの人間である」ととらえるようになったのは、その証左であるといえよう。また、参加を通して知的障害のある人とのつながり、ボランティアどうしにつながりが生まれている。このことは、ボランティアの継続参加を促している。このような「学び」の経験や人と人とのつながりこそが、この取り組みをより豊かな人間関係を生み出すものにする内実であろう。

ボランティアへの参加経験によって障害者理解が進んでいるとはいえ、その理解度は個人によって濃淡がある。理解したとしても、学生は数年間という期間しか大学に所属せず、卒業後に彼女・彼ら自身の中にながに残って

いくのかは不明である。しかし、彼女・彼らは、ボランティアの経験を通して、知的障害のある人の学習ニーズに気づいたという点では、この問題についての当事者性を獲得したともいえよう。卒業後に実質的なかわりが途切れてしまっても、知的障害のある人の学習権の保障についての問題意識を持ち続け、広い意味でのサポーターでありつづけてくれるかどうかは、参加経験の中で支援者としての当事者性にどう気づいてくれるか、ということにかかっているようにも思われる。

全国でさまざまな形態で行われている知的障害のある人の生涯学習活動をみると、さまざまな任意の団体、大学、特別支援学校(旧養護学校)、行政、関連福祉施設、社会教育施設など多様な支え手がいる。オープンカレッジの運営における大きな課題は、人材の確保(ボランティアや講師など)<sup>12)</sup>と財源の確保<sup>13)</sup>である。制度的な保障が十分でない中で、知的障害がある人の生涯学習の場を保障していくためには、地域の多様な団体や機関がネットワークを組み、多様な市民が参加して活動を支えていくしくみをつくっていくことが求められているのではないかと考えている。

現状においては、オープンカレッジの取り組みは、まだそのような多様なネットワークまでは実現できておらず、限定された団体や関係者による参加や支援にとどまっている状況にある。オープンカレッジの理念の一つでもある「大学の地域貢献」をいかに促進させるかという課題も大きい。さまざまな人が混ざり合い、豊かな関係性が生み出されていく場としての展開ができなければ、立場の異なる人が「共に学ぶ」というこの活動の魅力が薄れてしまうかもしれない。活動への参加を通して得られる「学び」の豊かさを伝えながら、より開かれた、多様な人々が参加できるしくみを模索しながらいかねばならないと考えている。

謝辞：本研究は青森県立保健大学健康科学特別研究費の助成を受けて行いました。本調査にご協力くださいました皆さまに心よりお礼申し上げます。

〔受理日：平成21年5月14日〕

## 注

- 1) 青森県教育庁生涯学習課：平成20年度青森県の社会教育行政。2008.4
- 2) 山内修、廣森直子、中堀久子、工藤陸美：知的障害者の生涯学習の実態把握と学習保障システムづくりに関する研究(平成17年度青森県立保健大学健康科学特別研究中間報告書)。2006.3
- 3) 廣森直子、山内修、中堀久子、工藤陸美：青森県における知的障害のある人の生涯学習活動の現状と課題－



- 受講生調査から－. 青森県立保健大学雑誌, 8 (2), 2007
- 4) 建部久美子、安原佳子：知的障害者と生涯教育の保障－オープン・カレッジの成立と展開. 明石書店, 2001
  - 5) 同前掲 4
  - 6) その経緯の詳細は、前掲 2 を参照されたい。
  - 7) 学生スタッフの進行スケジュール表により筆者作成。
  - 8) オープンカレッジは年 4 回ペースで開催されている。2 回の調査を行った 2 月は、それぞれの年度の最終回である。年度の最終回には、閉講式で受講生への「修了証書」を渡している。
  - 9) 同前掲 2
  - 10) 2 回の調査時には 3 学科（看護学科、理学療法学科、社会福祉学科）であったが、2008 年 4 月より栄養学科が開設され、4 学科体制となった。
  - 11) 青森県における本人組織「レインボー青森」のこと。青森県の手をつなぐ育成会（保護者の会）と連携しながら、知的障害のある人本人たちが 2003 年 6 月 29 日に設立した当事者組織。本人活動として「スキルアップ研修」なども行っており、青森・弘前・八戸に支部がある。
  - 12) 運営には、スタッフ・サポーターなどのボランティアの存在は欠かせないが、学習のバリエーション（選択肢）を保障していくためには、講師の確保も大きな課題である。
  - 13) 発足当初は、助成団体による助成金、現在は大学からの助成を受けているが、それですべての費用を賄うことはできていない。

#### (参考文献)

- 教育と医学, 50 (12) (特集：自分らしく生きるために学ぶ－障害のある人の生涯学習) 2002.12
- 國本真吾ほか：知的障害者を対象とした高等教育保障の実践－「オープンカレッジ in 鳥取」の現状と課題. 鳥取大学教育地域科学部教育実践総合センター研究年報, 12, 2003.3
- 國本真吾：青年期における障害者の主体的な社会参加と自立－障害者青年期教育論の現代的意義. 教育, 2003.10
- 國本真吾：障害青年の高等教育への権利保障. 鳥取短期大学研究紀要, 51, 2005
- 小林繁編著：学びあう「障害」－障害者の生涯学習実践. クレイン, 2001
- 小林繁編著：この街がフィールド－障害をもつ人の生涯学習ハンドブック. れんが書房新社, 1998
- 小林繁編著：学びのオルタナティヴ－障害をもつ市民の学習権保障の課題と展望. れんが書房新社, 1996
- 小林繁編著：君と同じ街に生きて－障害をもつ市民の生涯学習・ボランティア・学校週五日. れんが書房新社, 1995
- 松矢勝宏監修／養護学校進路指導研究会編：大学で学ぶ知的障害者－大学公開講座の試み. 星雲社, 2004
- 中西正司、上野千鶴子著：当事者主権. 岩波新書, 2003
- 日本発達障害福祉連盟：発達障害白書 2009 年版. 日本文化科学社, 2008
- 建部久美子、安原佳子：知的障害者と生涯教育の保障－オープン・カレッジの成立と展開. 明石書店, 2001
- 津田英二：セルフ・アドボカシーにおける本人と支援者との関係性変容. 神戸大学発達科学部紀要, 10 (1), 2002
- 津田英二：セルフ・アドボカシーの支援をめぐる基本的視点－支援者の属性と支援の内容に関する実証的研究. 神戸大学発達科学部紀要, 10 (2), 2003
- 津田英二、山本道子、余田卓也、他：知的障害のある成人への大学における学習プログラム提供－2003 年度公開講座『大学で自分の世界を広げよう』をめぐる. 神戸大学発達科学部研究紀要, 12(1), 2004
- 津田英二：知的障害者のエンパワーメント実践における当事者性. 神戸大学発達科学部研究紀要, 13 (1), 2005
- 津田英二：知的障害のある成人の学習支援論. 学文社, 2006